

「多の絵画」

一なる絵画と多の絵画。内的に充足した図像として、そこから引くことも足すことも要さない統制によって＜美＞を称える、このような「一なる絵画」の様態に抗して、「多の絵画」という概念を対置してみたい。一なる絵画は、自らの外側への広がりや欠きを、世界と不連続な図像として自らを規定することによって、超越的な存在として自らを世界と向かい合わせる。美しい絵画ではなく、＜美＞の絵画[イデア]。他方、多の絵画とは、複数であり、接続しながら自らを形づくる。

画家の画業のなかで、あるいは芸術社会のなかで、プロセスやネットワークの素子として絵画を捉えれば、一なる絵画を解除することはできよう。しかし、ことはそれほど単純ではない。ただちに、その絵画は全体の要素となり、ある画家の「一なる画業」や芸術の「一なる美」を導出してしまう。このとき、複数の系列、さらに系列自体の分岐も含んだ、多様な画業や美を構想することはできるだろう。しかし、一なる全体性への誘惑を解除できたとしても、制作者の視点からは離れなければならない。では、多の絵画を制作するとは、どのような事態であろうか。

西田幾多郎は、「物を作るとは、物と物の結合を変ずることではなければならない」と述べた。このように多の結び目に傾注することで、「一なるものへと収束する多」という図式を常に暫定的なものにすることが可能になるのではないか。なぜなら、結合子は、物と物とが互いに合致する形を反復するだけでなく、別様に相働く形に成り変わることができるからである。多様な蛋白質が生成変化し、鍵と鍵穴のように結合する様を思い起こしてみよ。

つまり西田に倣って言えば、多の絵画とは、独立した絵画が相互に結合子を形づくることによって複数化しつつ、常に別様の可能性にも開かれた様態である。結合子はその都度の選択肢群を持ち、組み変わり、新たな結合の仕方を発明する。その複数化するプロセスを包み込んだ像として、多の絵画は現前するのである。その絵は、その絵の様ではなかったかもしれない、しかし現にその絵であり、その絵として充足し、そこで留まっている。